

二〇一九年度入学者選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は目から目まで(16ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今の時代、そしてこれからのサイバーコミュニケーション全盛の時代では、異なる価値観や異なる文化背景を持った人と出会ったときに「どうにかする力」が重要になります。それも、機転を利かせるという「シユンパツリヨク」^①よりは、「粘り強い」コミュニケーション能力です。そのような状況に耐えて切り抜ける力を、私は「対話力」と呼ぶこともあります。

よく「対話とディベートはどう違うか」と訊かれます。ディベートでは、AとBが議論をして、どちらかが勝つてどちらかが負けず。Aが勝った場合は、AはAのまま、BがAに変わる。それに対し対話では、お互いが歩み寄ってお互いが変わるのです。AもBも変わるということを前提として議論を進めるのです。

ヨーロッパでの仕事の際に、三十分ないし一時間ほど議論する場合、大体日本人のほうが計画性があるから、こちらに近い意見に落ち着くことが多い。その際、例えば「それ、三十分前に私が言ったことほとんど同じだ」と言うと、ヨーロッパの演道家は必ず、「いや、これは二人で出した結論だ」と言う。その、二人で出した結論だということが大事なんです。

逆に、日本人との混成チームで議論を行うと、日本人サイドには、その三十分が耐えられないのですね。「もういいじゃん、これで。こっちのほうが絶対合理的じゃん」と議論を切ってしまう。多くの日本人は、なぜ彼らがそういう主張をしているのかということを考えようとしません。

日本人は議論を続けると、諦めるか、キレちゃうか、どちらかになってしまふ。国際社会で生きていくには、その三十分の体力が必要になります。私はこれを「対話のための体力」と呼んでいます。

コミュニケーションの技術は後からでも身につけることができます。大学生や大学院生でも、社会人でも。でも、対話のためのキツ体力^②は、小学校のときから対話を延々行うといった訓練をしないと、なかなか身につかないと思います。

これからは、日本人同士でも価値観が大きく異なっていくので、「日本人ならわかってよ」「日本人なら察してよ」という暗黙の要求は通用しなくなります。そのような状態で対話する体力も無くなると、なあなあで終わってしまうから、どんどん^③国

力が衰退していきます。今の国会みたいな感じですね。対話の体力が、国力に直結する時代なのではないでしょうか。

だいたい一九八〇年代の中盤までは、労働力を集約して資源を効率良く何かの製品に変えれば儲かっていた時代でした。組織力・効率において、日本企業は非常に強かった。日本の半導体工場では、九九・九九%まで不良品が出ないそうです。

ところがIT革命が起こった。ITの一つの大きな特徴は、コピーフリーということ。コピーにコストがかからない。つまり、九九・九九%じゃなくて常に一〇〇%全く同じコピーが可能で、しかもそこにコストがかからない。そうになると、過去の技術を非常に高い精度で継承させる、上意下達・終身雇用の徒弟制度のような会社構造は意味を成さなくなります。

でもそうはいつても、人間がやらなければいけない仕事はまだあります。ロボットが取って代わるのにあと二十年、三十年かかる作業もたくさんある。しかしそのような単純作業の部分では、労働市場が底抜けしています。ソビエトが崩壊しベリリンの壁が無くなり中国が資本主義化してしまつて、約一五億から二〇億人の単純労働人口が資本主義社会になだれ込んでしまつたために、労働力がいくらでも安く手に入るようになってしまつたのです。

⁴ その二つが重なつたために、日本の一致団結型の企業論理が、全く意味を成さなくなつてしまつた。これからは、若い世代から出てきた豊かな発想、新しい発想を有機的に取り込んでいかないと、国際市場では勝てないのです。

また、ものづくりの技術を高度化していけば絶対に他国に追いつかれないという神話がありました。もはやそれが嘘だということとは明白で、中国だつて東南アジアだつてすぐに追いつきます。

ですから、真似ができないこと、真似がしにくいことは何かを考える必要があります。要するに同じ土俵で競うのではなく、全く違うアイデアやサービスの質で勝負するのです。そうすると、十年、二十年はもつわけです。それが付加価値です。

アイデアを生んで、それを活かすことが非常に重要になります。企業としても、若い人の、ちよつと聞いただけでは理解できないようなアイデアを、対話の体力で合意を形成して、形にしていく必要があるのです。世代によってズイブンライフスタイルが違ふから、そこから出てきたアイデアを活かしていかないと、企業として生き残れません。重層性のある対等なコミュニケーションを常に保てるような組織論を作つていかないと、企業に未来は無いでしょう。

問一 〓線部①～⑤のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 〓線部1「機転を利かせる」の意味として最も適切

なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 物事に応じて、相手を利用すること。

イ 物事に応じて、機敏に心が動くこと。

ウ 物事に応じて、考え方を否定すること。

エ 物事に応じて、機械的に処理すること。

問三 〓線部2「二人で出した結論だ」とあるが、どうい

うことを意味している表現か。説明せよ。

問四 〓線部3「どんどん国力が衰退していきます」とあ

るが、なぜ「国力が衰退して」といくと筆者は考えている

のか。説明せよ。

問五 〓線部4「その二つ」とあるが、日本の企業論理が

意味を成さなくなってしまう「二つ」の要因を説明せよ。

問六 空欄 に入れるのに、最も適切なものを次

の中から選び、記号で答えよ。

ア 問う イ 変わる ウ 決める

エ 実行する オ 対話する

問七 〓線部5「これからの時代に必要になってくるコ

ミュニケーション能力とは、組織の変革につながる

『対話の体力』といっていると思います」とあるが、筆

者は「対話の体力」が組織のどのような変革につながる

と述べているか。二点説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

五年生の一年間、一緒に飼育委員をやった。

小学校で飼っているウサギとニワトリの世話をするのだ。

ウサギは三羽、ニワトリも三羽いた。

飼育委員は毎年、なり手のない役だ。

毎日水替え餌やり、飼育小屋の掃除の仕事があるし、連休や夏休みといった長期の休みでも毎日のように、登校しなければならぬからだ。

わたしは、じゃんけんで負けて飼育委員を押し付けられた。生き物は好きで、家にも猫二匹と犬が一匹いるから世話自体はそんなに苦痛ではなかったけれど、これで、お休みが潰れちゃうなどと考えると少し憂鬱な気分にはなった。

五年生は二クラスしかなくて、飼育委員は各クラス一名ずつ。

わたしと光くんだった。

¹ 最初、がっかりした。

落胆なんて言葉をまだ知らなかったけれど、本当に身体の力が抜けるような気がした。

飼育委員で、しかも相手が男の子なんて、最低、最悪だ。動物の世話を真面目にしてくれる男子なんているわけがない、と、わたしは思い込んでいたのだ。

光くんも、じゃんけんかくじ引きで無理やり押し付けられた口だろう。きっと、すごくいいかげんで、無責任で、途中で仕事を放棄することだって十分に考えられる。

覚悟しなくちゃ。

わたしは覚悟した。

ウサギもニワトリも、世話をしてやる者がいなければ死んでしまう。殺すわけにはいかない。自分に預けられた生命を無視できるほど、わたしは凶太くはなかった。優しいわけではない。『わたしのせいで殺してしまった』なんて思いを引き摺りたくないのだ。凶太くないうえに、誰かに上手に責任転嫁できるほど器用でもなかったのだ。

不器用で、生真面目で、融通がきかない。

付き合ひ難い人だ、可愛げのない子だと言われていた。でも、しょうがない。これが、わたしだ。

不器用でも、生真面目でも、融通がきかなくても、わたしはわたしを生きるしかない。

わたしは、開き直ったように、でもどこか頑なに十一歳を生きていた。今でもまだ、そういうところはあるけれど、思い込みの強い性質なのだ。

光一くんに会って、変わった。

光一くんが変えてくれた。

「円藤って、飄々としてるね」

ウサギ小屋の掃除をしながら光一くんと言われたことがある。飄々の意味がわからなかった。

糞を掃き集めていた手を止め、わたしは振り向く。光一くんがわたしを見上げていた。

目が合った。

柔らかな淡い眸だ。

光一くんと目を合わせたのは、このときが初めてだった。

「飄々って？」

わたしが尋ねる。光一くんが首を傾げる。

「うーん。大らかってことかなあ。あんまり、ごちゃごちゃこだわらない、みたいな……感じかな」

「そんなことないよ」

大声で否定していた。

自分で自分の声に驚いてしまった。

ウサギの糞の臭いが鼻孔に広がって、咳き込む。

ごほっ、ごほごほ。

「円藤、だいじょうぶか？」

「うん……だいじょうぶ。ちよっと……びっくりしただけ」

「びっくりするようなこと、言ったっけ？」

「言ったよ」

わたしは臭いにむせて、また、咳いていた。

光一くんが片手でわたしの背中を叩く。これにも、驚いた。もう五年生だ。男子と女子の距離が何となく開いていく時期だった。距離の取り方をみんな、手探りしている時期だった。

こんなに **A** 背中を叩いてくれるなんて、叩けるなんて不思議だ。

「何を言ったかなあ」

背中を叩きながら、光一くんが咳く。妙にのんびりした口調だった。光一くんに合わせてるように、隣のニワトリ小屋で雄鶏のコースケがのんびりと鳴いた。

コケー、コケーツコー。

おかしい。

おかしくてたまらない。

噴き出してしまった。笑いが止まらない。

「えー、今度は笑うわけかあ。どうしたらいいんだらうなあ」

光一くんの一言に、わたしはさらに笑いを誘われる。

おかしい、おかしい。ほんと、おかしい。

何て、おもしろい人だろう。

何て、ヘンテコで愉快な人だろう。

知らなかった。

下野原光一くんて、こんな人だったんだ。

笑いながら、わたしの心は、ほわりと軽くも温かくな³って行く。

心地よかった。

光一くんは、飼育委員の仕事を怠けなかった。いいかげんに済ますことも手を抜くこともしなかった。むしろ、わたしより熱心に取り組んでいた。

夏休みには、ちゃんと当番表をこしらえて、友だちや先生にも協力してもらって、毎日、登校しなくていいように工夫した。ニワトリ小屋に新しい餌場や水飲み場も作った(プラスチックの桶とペットボトルを組み合わせた簡単なものだったけれど、とてもしつぱに見えた)。学校近くの農家を回って、野菜の屑を分けてもらい餌に混ぜたりもした。野菜屑とはいえ新鮮で、ニワトリもウサギも餌箱に入れたとたん、夢中でついでに、かぶりついた。

光一くんが自分から飼育委員に立候補したと聞いたのは、水飲み場を作っている最中だった。

ずっとやりたかったんだと光一くんは言った。

「五年生になったら、絶対立候補するって決めてたんだ」

飼育委員は五年生だけの役目だ。五年生しか、なれない。

「飼育委員の仕事……好きなの」

ペットボトルを光一くんに渡す。光一くんは、それを針金で作った輪っかに差し込み、水の出方を調べる。うなじを幾筋も

の汗が伝っていた。

「動物、好きなんだ。犬でも猫でもウサギでも」

「ニワトリも？」

「あ……ニワトリのことは、あんまり考えてなかった。でも、コースケやコッコやクックはかわいい。飼育委員になってから、ニワトリがかわいって思えるようになった」

「わたしは嬉しかった。三羽の白色レグホーンのことをかわいいと言ってくれる人が傍そばにいることが嬉しかった。

光一くんもつといるんな話があった。でも、何をどう話したらいいのか見当がつかない。軽やかに、適当におしゃべりする技術をわたしは、ほとんど持ち合わせていなかった。

⁴ 自分が歯痒はがゆい。痛いほど歯痒い。

「円藤も、動物好きだよな」

光一くんが顔を上げ、額の汗を拭う。わたしは、じゃんけんで負けて飼育委員を押し付けられただけ……とは言えなかった。

「あ、うん。家にも猫と犬がいるし……」

「ほんとに？ 猫も犬もいるわけ。すげえな」

「あつ、そんな。どっちも雑種だよ。犬は近所からもらってきたの。猫は二匹とも捨て猫。真っ白とミケ」

「えーっ、猫が二匹もいるんだ。すげえすげえ」

「だから、雑種なんだって」

「雑種でもすげえよ。いいなあ、猫と犬かあ」

「ペット、いないの？」

光一くんがうなずく。それから、小さく息を吐き出した。

「妹が喘息ぜんそくきみなんだ。動物の毛にすごい反応しちゃうから、家ではペット、飼えないんだよな」

「妹、いるんだ」

「うん、いる。一人ね」

「いくつ？」

「今年一年生になった。でも、けっこう、休むことが多いかな」

「そう……、じゃあ飼育委員とかできないね」

「うん、おれが飼育委員になったって言ったら、いいなあってすごく羨ましがってた」

「何て、名前」

「あかり。平仮名であ、か、り」

「かわいい名前だね」

光一くんが動物を好きなこと、四つ違いのあかりちゃんをかわいがっていることを、わたしは知った。

飼育小屋の中で、わたしと光一くんは **B**、会話を交わした。その度に、わたしは光一くんのことを知っていく。わたしの中に光一くんが溜^たまってくる。積み重なってくる。

わたしは今でも、小学校の飼育小屋を鮮明に思い出すことができる。緑色の円錐^{えんすいけい}形の屋根を、亀の甲羅模様みたいな金網の目を、ウサギやニワトリの糞の臭いを、コースケの紅色の鶏冠^{とさか}を、ウサギたちの白い前歯を、光を浴びて輝いていたペットボトルの水を、ちゃんと思いつくことができるのだ。

コースケたち三羽のニワトリは、わたしたちが六年生になって間もなく、死んだ。新たに飼育委員になった五年生が、戸の鍵を閉め忘れてしまったのだ。戸を開けて、野良猫か野良犬か、あるいは裏山から狐^{きつね}が小屋に忍び込んだらしい。

ニワトリたちは無残に殺された。その中でも、コースケは特にひどく、ほとんど頭が食い千切られていたそうだった。わたしがニワトリ小屋に駆け付けたとき、小屋には何もいなかった。血の跡と白い羽毛が地面に散っているだけだった。光一くんが作った水飲み場は壊れ、ペットボトルが斜めに傾^{かし}いでいた。

何もいなかった。
からっぽだった。

「コースケ」

金網に指をかけて、呼んでみる。
糞の臭いはまだ残っているのに、コースケたちはいない。
消えてしまった。

「コッコとクックを守ろうとして、戦ったんだよね」
消えてしまったコースケに話しかける。

目の奥が熱くなった。

6

わたしはわたしがコースケをとっても好きだったんだと気がついた。
いなくなつて、やつと気がついた。

コースケが好きだったんだ。

紅色の鶏冠を揺らして堂々と歩く姿も、年をとって元気のなかったクックに寄り添っていた優しさも、止まり木に掴まり損ねてしよちゅう落っこちていたお馬鹿な格好も、好きだった。

コースケ。

額を金網に押し付けて、泣いた。跡が **C** 残るだろう。みっともない顔になるだろう。
かまいはしない。

泣くより他に何もできない。

「円藤……」

背後で名前を呼ばれた。

振り向かなかった。

振り向かなくても、光一くんが立っているとわかった。

光一くんは、わたしの横に来て、わたしと同じように金網に指をかけた。そして、同じように目を凝らした。一生懸命に捜せば、どこからかコースケが現れると信じているみたいに、見詰めていた。

光一くんが何も言わないのがありがたかった。

わたしは黙って、立っていた。

光一くんも黙って、立っていた。

(あさのあつこ「下野原光一くんについて」による)

問一 ――線部1「最初、がっかりした」とあるが、それはなぜか。このときの「わたし」の気持ちを説明せよ。

問二 ――線部2「びっくりしただけ」とあるが、なぜ「びっくりした」のか。その理由を説明した文章として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 自分は男子との距離の取り方に迷っている時期だったのに、光一さんと初めて目が合ってしまったから。

イ 自分は動物の生命を無視できず世話をしているだけだったが、光一さんに誤解されているとわかったから。

ウ 自分は飼育委員を押し付けられても黙っているような性格なのに、光一さんに向かって大声を上げていたから。

エ 自分は不器用で生真面目で融通がきかない人間だと思いつ込んでいたが、光一さんに正反対の評価をされたから。

問三 空欄

A

C

 に入れるのに、最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア あつざりと イ いらいらと
ウ はつきりと エ ほそほそと

問四 ――線部3「わたしの心は、ほわりと軽くも温かくなつて行く」とあるが、光一さんの言動が「わたし」にとってどういう意味を持つものだったから、「軽くも温かくなつて」行ったのか。説明せよ。

問五 — 線部 4「自分が菌瘁い」とあるが、これは「わたし」のどのような気持ちの表れか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア これまでの自分にあきれ返り、信じられない気持ち。

イ これからの自分に期待をかけ、楽しみに思う気持ち。

ウ これからの自分が思いやられ、逃げたいという気持ち。

エ これまでの自分もどかしく、変わりたいという気持ち。

問六 — 線部 5「わたしは今でも、小学校の飼育小屋を鮮明に思い出すことができる」とあるが、ここから読み取ることのできる「わたし」の気持ちを説明せよ。

問七 — 線部 6「わたしはわたしがコースケをとても好きだったんだと気がついた」とあるが、「わたし」にとって「コースケ」とはどのような存在だったと言えるか。説明せよ。

三

次の文章は、源頼光が立ち寄った弟の頼信の屋敷で、縛られている鬼同丸を見たことから始まる話である。読んで、後の問いに答えよ。

頼光驚きて、「いかに鬼同丸などを、あれ体にはいましめ置き給ひたるぞ。犯しあるものならば、かくほどあだにはあるまじきものを」といはれければ、頼信、「実にさることに候」とて、郎等呼びて、なほしたたかにいましめさせれば、金鑊かなくぎりを取り出して、よく逃げぬ様にしたためてけり。鬼同丸、頼光のたまふ事を聞くより、「口惜しきものかな。何ともあれ、今夜のうちに、この恨みをば報はんずるものを」と思ひゐたりけり。*はいしやくすこん盃酌数献はいしやくすこんになりて、頼光も酔ひて臥しぬ。頼信も入りにけり。夜の中しづまるほどに、鬼同丸、究竟*くつきやうのものにて、いましめたる縄・金鑊ふみ切りてのがれ出でぬ。狐戸*より入りて、頼光の寝たるうへの天井にあり。この天井ひきはなちて落ちかかりなば、勝負すべき事、異義あらじと思ひためらふほどに、頼光も直人たなびとにあらねば、早くさとりにけり。落ちかかりなば大事なりと思ひて、「天井に、いたちよりも大きに、貂てんよりも小さきものの音こそすれ」といひて、「誰か候」と呼びければ、綱*、なのりて参りたりけり。「明日は鞍馬くらまへ参るべし。いまだ夜を籠めて、これよりやがて参らんずるぞ。某それがし々供すべし」といはれければ、綱つげたまは奉りて、「皆これに候」と申してゐたり。鬼同丸この事を聞きて、ここにては今は叶ふまじ、酔ひ臥したらばとこそ思ひつれ、なまさかしき事しいでは悪あしかりなん、と思ひて、明日の鞍馬の道にてこそ、と思ひかへして、天井をのがれ出でて、鞍馬のかたへ向きて、市原野の辺にて、便宜*の所を求むるに、立ち隠るべき所なし。

(『古今著聞集』による)

【注】 *盃酌数献はいしやくすこん 酒を数杯飲むこと。

*究竟くわいじやう 「屈強」に同じ。

*狐戸こらど 屋根についている格子戸。

*綱つな 渡辺綱。頼光の由来。

*なまさかしき 中途半端な。

*便宜べんい 好都合であること。

問一 —— 線部 1「驚きて」とあるが、頼光が驚いた理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 犯罪者なのにいい加減に縛ってあったから。

イ 犯罪を防ぐために万全の策をとっていたから。

ウ 犯罪者と確定していないのに縛ってあったから。

エ 縛られてはいるが、犯罪者には見えなかったから。

問二 —— 線部 2「この恨み」とあるが、どのようなことに対する恨みか。簡潔に答えよ。

問三 —— 線部 3「早くさとりにけり」とあるが、頼光は何に気づいたのか。簡潔に答えよ。

問四 —— 線部 4「ここにては今は叶ふまじ」について、あの問いに答えよ。

I 何ができないと考えたのか。簡潔に説明せよ。

II なぜできないと考えたのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア すでに夜が明けて明るくなってしまったから。

イ 頼光が目覚まして家来を呼び集めているから。

ウ 鬼同丸ですら天井から落ちると大げがをするから。

エ 狐やいたちなどを追い払わなければならないから。

問五 鬼同丸は、—— 線部 5「明日の鞍馬の道にてこそ」と考えるが、結局そこで討たれてしまう。この話から読み取ることができる、頼光の優れている点を説明せよ。

